

さいゆうしゅうしょう
最優秀賞

こうこうせいくぶん おきなわけんち じしやう
高校生区分〈沖縄県知事賞〉

ひとり せんざい
もう一人の存在

おきなわけんりつきゅうようこうとうがっこう
沖縄県立球陽高等学校 二年

よねかわ
米川 太陽

「おめでとうございます！二人とも元気な男の子ですよ」

いくつもの声が、重なって聞こえた。事を終えて、安堵する

いし へん かんきわ はは へん
医師の声。感極まった母の声。そして、まだ泣いている小さな命

へん にせんさんねんろくがつなのか へん
の声。二〇〇三年六月七日。僕は生まれた。へその緒が切り離さ

れ、横には、つい十三分前に生まれた、僕の兄が眠っている。

こうして僕は、双子としてこの十七年間を生きてきました。毎

年迎える誕生日も、優しく待ってくれる家も、思い出のあの

しやしん へん いたしよ
写真も、僕らはいつとも一緒。ですが、幼稚園、小学校を共にし、

ちゅうがっこう べつべつ がっこう い
中学校からは別々の学校に行くことになりました。このことを

きつかけに、ある質問を度々されるようになりました。

みな へん とうだち ひとり ふたご し
皆さんなら、高校で初めて、友達になった人が双子だと知っ

た時、まず何を質問しますか？きつと、もう一人の存在が気に

なるのではないのでしょうか。僕は高校に入ってよくこんなこと

を聞かれました。「え？お前双子なの？もう一人は？この学校に

いる？ひよつとして、別の学科？」この何気ない問いに、僕は

いつも困ってしまいます。この時、正直答えると、相手は表情

を曇らせながら「なるほどね。」と言うのが目に見えています。

へん へん ふたご へん とう じゅうど ちてきしやう
僕の双子の兄は、生まれつき、重度の知的障がいがあり、

じへいしやう わずら へん ちゅうがっこう けんりつ とくべつ
自閉症も患っています。そのため、中学校からは、県立の特別

しえんがっこう かい いま がっこう こうとうが まいにちべんきやう
支援学校に通い、今もその学校の高等部として毎日勉強をして

います。勉強とはいえ、皆さんみたいに因数分解や二次関数ができるわけではありません。この前の診断によると、兄の学習能力は小学二年生。コミュニケーション能力は、たったの三歳。上手く会話ができません、何を考えているのか、何を伝えたいのか、理解するのに時間がかかることもあります。そんな兄ですが、周りに自慢できる特技があります。それは、ピアノです。中学の時、兄は副担任の先生が音楽の担当をしていたことをきっかけにキーボードに興味を持ちました。そして、そこから数ヶ月練習しただけで全校生徒の前で校歌を弾くほどに成長しました。それだけでは終わりません。兄は、みるみる上達していきます、たったの三ヶ月の練習で、全日本音楽研究会のセレモニーの演奏を任されるほどになりました。自閉症というハンディキャップを乗り越えて見事に演奏をやり切ったのです。

しかし、そんなことなど知る由もない世間が見れば、一人の障がい者に過ぎません。障がいを持っている。この事実だけが、兄を証明する、看板であり、十字架であるのです。これは、僕と兄で散髪屋さんに行った時の話です。その日は日曜日だったこともあり、店の中には何人も人が順番を待っていました。一時間後、その日は、兄の担当の人が休みということもあり、別の人が兄の髪を切ってくれることになりました。僕が隣の席で髪を切ってもらっている時、どこからか舌打ちが聞こえてきました。誰が舌打ちなんてしたんだろう。そう思っていると、笑いながら、首をくすぐったそうにしている兄が目に入りました。その瞬間、舌打ちをしたのは、そんな兄の髪を切る理容師さんからだと分かりました。兄はその時思った感情や感じたことを、我慢することができません。加えて、いつもと違

う人だったため、決まったことを好む兄にとっては突然のことに理解できないのも、当然です。ですが、初対面の人からすると、髪を切らせてくれない迷惑な客。落ち着きのない障がい者。そう、見えたのでしよう。兄に向けられたあの舌打ち。兄がこの舌打ちの意味を理解できる日は、恐らく、来ない。いや、来てほしくない。兄はこんな風にこれから先、迷惑な存在として生きていくのか。そんなことを考えると胸が苦しくなりました。兄は、ただ生きていくだけなのに。できないことに囲まれながらも、頑張つて生きているのに。障がい者への理解が深まってい一方、中々理解してもらえない人がいるのもこの社会の現状です。だから僕は、この文を書くのが正直怖かった。中学校一年生の時、双子の兄のことを意見文にすると、それを知った人に冷やかされることがあった。それから僕は高校に入って双子

の兄のことをあまり話さないようにしていた。障がいが無ければ、きっと今ごろ、同じ高校で、僕の横で、笑っていたかもしれない。

僕は双子としてこの十七年間を生きてきました。兄も一緒に。それでも、兄の中身はまだ三歳。双子なのに年齢が違う。お兄ちゃんなのに、お兄ちゃんらしくない。

僕の、双子の兄の名前は米川朝陽。そして、僕が太陽。朝陽と太陽のように世の中を明るく照らしてほしいという願いを込めて、母が名前をつけてくれました。双子として、何不自由無く生きてきた弟と不自由の中で生きてきた兄。本当に、僕だけが幸せになっていいのだろうか。そう考えた日もありました。だからこそ僕は、兄を含む障がいを持つ人を幸せにしたい。そのためには、一人一人が、障がい者への偏見、差別をなくす

こと。手と手を取り合い、大丈夫ですか？と、声をかけること。

そして、僕が一番伝えたいこと。それは、障がいを持っている

といっても、できないことばかりではないということ。一緒に

生活していると、兄のできることがよく見えてきます。障がい

者という言葉で終わらすのではなく、その人自身を見つめるこ

とが障がいのある人となない人の心の輪を広げる第一歩だと僕

は思います。障がいがあってもなくても、共に笑い合える社会

は、ずっと前から迎えを待っています。僕らは、その社会を照ら

す光になりたい。

夜を優しく包み込む朝陽と太陽のように。